



# 夢見る少女は境界を知る



R\_gray

## 夢

---

真っ暗な世界に、私はぼつんと立っていた。

また夢の世界に迷い込んだみたいね、そうひとりごちて、周囲を歩き始める。

何もない世界を当てもなく歩いて行く。普通夢の世界って言うともっと面白味に溢れてるものじゃないのかしら、そんな愚痴を夢に対して零しながら。

歩いても歩いても、見えるのは暗闇と、ハッキリとした自分の姿だけ。

余りにも面白味がないのと歩き疲れたせいもあって、そのまま床にぺたんと座り込んだ。

発見もないし、蓮子に話すまでもないでしょうね。

……暇だなあ。

このまま寝たら現実世界の私は起きれるんじゃないかしら、そう思って横になってみるけども、暗い床は想像以上に硬くて、ゾッとするほど冷たかった。どうにも寝れそうにもない。

どこかに抜け道はないのかとか考えて周囲を見てみるけれど、境界はこれっぽっちも見えない。

打つ手なしか、そう思ってため息を吐いた瞬間、背筋が凍る程の視線を感じた。

恐る恐る後ろを振り返ると――

「――っていう夢を見たのよ」

「メリー、そういうのは世間一般的に悪夢って言うのよ」

蓮子はため息を吐いた。

「まあ確かに、その視線の正体は分からなかったんだけどね」

あの後私は目を覚ましてしまった。高所から落ちたら目を覚ました、とかそんな類いだ。

「何か面白い物を持ち帰ってくるでもないし、それじゃあただの夢じゃない」

蓮子はテーブルに突っ伏して顔を潰しながらブーブーと不満を漏らした。

「まあそうなんだけど……あの夢を見てから、今までより多くの境界を見るようになった気がするの」

蓮子の目がスッと鋭いものになる。

「ふうん……続けて」

「例えば道の脇とか、木々の境目とか」

「なるほど……興味深いわね」

蓮子が少し考えこむ用にあごに手を当てた。

「夢が能力の底上げをしている、それとも能力が上昇したからその夢を見たのかしら」

「どうなのかしらね？私でもよく分からないもの。……ねえ、蓮子は夢のことどう思う？」

蓮子の視点から見たらどう思うのか、聞いておきたかった。

「う～ん……取り敢えず」

しかし今の蓮子はカバンの中をさばくって一枚の写真を取り出すと、

「ここに行きましょう！」

そう満面の笑みで言った。

まあいっか。

内心、私は焦りを感じていた。

メリーの能力が上昇することは別に悪いことじゃない。むしろ私たちの活動にとっては喜ぶべきことだ。

でももし、危険な、例えば妖怪の沢山いる世界に行ってしまったとしたら？

メリーにはそれに対抗する力はない。もちろん、私にも。

同様のことは前にもあった。でも前は夢という自意識の曖昧な状態であったから、メリーの中の『境界というモノ』への認識が曖昧になっていたから、だからこそ能力の制限が解除されていたのかもしれない。

しかし今は現実において自覚している。自覚してなお、現世と幽世の境界をより敏感に感知できるようになっている。明らかに能力は増大している。

だが、メリーの能力はあくまで『見る』だけだ。操る、という域までは至っていないだろう。少なくとも自意識で行使することは出来ない筈だ。しかし……無意識の内に行使しているとすれば？

その夢だって、“本当に命の危険が迫っていた”から、“夢から醒める為に”能力を無意識に使い、その結果助かっただけなのかもしれない。

もしメリーが現実という意識を保ったまま危険な世界へ渡ってしまったら、或いは……。

自分の想像にゾッとしてしまう。だけど目を逸らしてはダメ。メリーの、私の相棒の命が掛かっているのだから……。

その為にも、今は――

## 旅行

---

「蓮子がただの旅行に誘うだなんて、珍しいこともあったものね」

「そうかしら？大学生の長期休暇と言えばむしろ普通だと思うのだけれど」

「蓮子が“普通”ねえ……まあいいけど」

「なにこれ？」

蓮子が提示したのはなんてことはない、森の風景写真だった。

「今度はここに行こうかな、ってね」

「でもここ、結界なんてありそうにないけど」

そうなのだ。蓮子が提示した写真には青々とした木々が茂っているが、どこか自然味が感じられない。

恐らく観光地として整備されたもので、人為的に作られた自然であろう。

「まあまあ。“合成”には“合成”なりのよさってものがあるのよ」

「そんなものかしら？」

「そんなものなのよ」

「ん～っ！」

大きく伸びをする。森はいい。言葉や科学では説明出来ない何かが心を癒してくれる。

「なによ、やっぱり満喫してるじゃない」

蓮子が苦笑するように言った。

「そうね、あんまり整備がされていなくて、石階段に天然の苔が生えているのもいいポイントだわ」

「人も私たち以外いないしね」

そうなのだ、周りには人っ子ひとりいない。ここにあるのは、私と、自然と、蓮子だけ。

「しかしよく出来たものね、ここが禿山だったとは考えづらいわ」

高度経済成長時代に大規模な伐採が行われたこの山も、今では周りに広葉樹が生い茂り、林道にはここが何百年も使われているような錯覚を起こさせる石が敷き詰められている。

「まあね。でもここだって禿山になる前は今よりももっとすごい“天然”の森だったわけだし、そう考えると別に不思議でもなんでもないわ」

「まるで……時間を巻き戻してるみたいね」

失われたものを取り戻すかのように。

「あっ、メリー！あそこ！」

蓮子が森の中の一点を指し示す。そこには、

「キツネだ……」

合成の森であろうと、そこに天然の物が居着くようになったのなら、そこは合成なのだろうか、天然なのだろうか。

現と虚をどうやって見極めればいいのか。

「「あっ」」

キツネは私たちの視線に気づいたのか、こちらを少し見て、どこかへ行ってしまった。

茫然と見送った私たちは、いつの間にか日が傾いていることに気が付いた。

「.....宿に行こっか？」

「そうね」

蓮子の提案に私の疲れた脚は賛同し、私たちは森をあとにした。

## 満月の夜

---

「蓮子……大丈夫なの？すごく高そうなんだけど……」

「大丈夫よ！メリーは大船に乗った気でいけばいいのよ！」

「あらそう？……って言ったそばから財布確認されたら不安になるじゃない」

私たちは森から程近い旅館に来ていた。

これがやけに歴史がありそうで、いかにも高級そうな感じがするのだけど。本当に大丈夫なのかしら。

通された部屋は二人では十分過ぎる広さがあって、さらには露天風呂まであった。至れり尽くせりとはこのことだろう。

ただ……部屋に入った時の蓮子の喜と哀が混ざり合った表情には少し複雑な気分になったけど。

一足早く露天風呂から出た私は、縁側に座って月を眺めていた。

「綺麗…」

落ちてきそうなほど大きな満月が、私に自然と言葉を漏らさせる。

ふと、蓮子は月を見た時にどう思うのか気になった。

場所という概念が頭に流れ込んでくる蓮子に月はどう見えるのだろうか。純粹に綺麗と思えるのだろうか。

そんな憂いにも似た感情は、

「綺麗に月が見えるわね！」

後ろから飛んできた当人の言葉によって打ち砕かれた。

「…ねえ蓮子」

「なあにメリー」

そう私の名前を呼んだ脳天気な相棒の顔は、空に浮かぶ月のように輝いていた。

蓮子にとって、そんな付加価値など些細なものなのかもしれない。そう感じさせるような爽やかな笑顔だった。

でもどうせだから聞いてみようか、そう考えた時だ。

「メリー、あれを見て」

蓮子が打って変わった神妙な表情で、庭を指差した。

そこには、

「キツネ…？」

あの森で見たものと瓜二つのキツネがいた。

「この庭ってあの森に繋がってるのかしら」

そう、蓮子が口にすると、キツネはあの時と同じように背を向けて、今度はゆっくりと奥の茂みへと入っていった。

まるで……

「誘ってるみたい……」

私の心の声を、蓮子が引き継いだ。

「ねえ、行ってみない？」

蓮子がニコリと微笑みかける。

私は何か言いようのない不安に駆られたのだけど、多分蓮子は私が止めても止まらないだろうし、止まる気もないだろう。

それなら、相棒の私は、

「全く…しょうがないわね」

行くしかないじゃない。

二人は、夜の森に潜っていく。



キツネは度々こちらを向いた。まるでちゃんと付いてきているか確かめているように。少し進んでは止まって振り向き、少し進んでは止まって振り向くのだ。

あざとささえ感じる程に。

「あのキツネ、どこまで行くのかしら」

もう追い始めてから結構経っている。

旅館からかなり離れてしまったのではないか。

「どうなのかしらね、目的地があるような気はするんだけど...」

「ねえ蓮子、あれ」

まるで私たちの心情を察したかのように、目的地であろう場所が現れた。

そこは木が生えておらず、月の光が差し込んでいた。

中央には石で囲まれた小さな池があった。

キツネは止まることなく池の前まで駆けると、一度こちらを振り向いて、

「あっ」

ぽちゃん、と池の中に飛び込んだ。

しかし浮かんではこない。

私たちはゆっくりと森からその広場へ歩を進めていく。

「ねえメリー、あそこって」

「ええ.....間違いないわ」

私にはその池がこの場所とは違って見えた。暗い、別の場所へつながっている、その綻びが見えた。

ゆっくり、ゆっくりと、広場の中へ.....。

「っ!？」

「どうしたのメリー」

「蓮子!戻らないとー」

メリーの手を掴み、来た道を引き返そうと、

「そんな.....遅かった」

だが先程まで私たちが来た森はなくなっていた。あるのはこの広場と同じような、足元までの草が生えているだけの世界が、延々と続いている。

「.....どういうことなの、メリー」

「私も入るまで気づかなかった。あの広場自体が、異なる世界に存在していたみたい.....私たちは、」

「閉じ込められた、ってことね」

至極冷静に蓮子は言い放つ。

「そんな冷静に.....」

「今までもあったことじゃない?なんとかなるわよ。私と、」

一度自分を差し、私を差す。

「あなたの眼があればね」

「違う……」

「え……？」

「……ここは違う、今までのとは違うの！まるで……夢の中みたいで……」

「だいじょーぶだって」

震える私を蓮子がそっと抱き寄せる。

「メリーは私が守るからさ」

……違う、違うのに。

「私は――」

「メリー。少し、私に体を預けて」

蓮子の口調が、突然冷静なものに変わる。

「蓮子……？」

「少し跳ぶよ」

蓮子はそう言うと、池の反対方向へと私を抱いたまま跳躍した。

そして、先程まで私たちがいた場所に、黒い影が恐ろしい速さで通り過ぎた。

「メリー、後ろに」

蓮子はその黒い影―妖怪―に直面して私に告げる。

「ちょっと蓮子！あなた」

「大丈夫。こんなこともあるかと」

蓮子はそう言いながら、懐から棒のようなものを取り出した。

「棒……？」

「いんや」

そう言って蓮子は腕を振ると、シャキンという小気味良い音と共にその長さが三倍程に伸びた。

「ああ特殊警棒……ってそれでなんとかなるの？」

「いや特殊警棒でもない」

そう言うと蓮子は手元のボタンを押した。すると、

「え……」

白い紙のようなものが先端からはらりと垂れた。

蓮子はもう一度ボタンを押し、

「特製、特殊スタン大幣」

白い紙の間にバチバチと電気を走らせた。

落ち着け、落ち着くんだ蓮子。

今、私には私だけでなく、メリーの命も背負っているのだから。

相手は一匹。犬のような瘦躯で真っ黒な体を持っている。尻尾が複数あるわけでもなし、まだ妖怪になりたてと言ったところか。あまり力は強くない筈だ。

大丈夫、勝てる。焦らず、侮らず、慎重に立ち向かうんだ。

手にした大幣を握り直す。

妖怪はこちらを見たまま、ジリジリと私たちの周りを円を描いて歩き始める。

それに対応して、私もメリーを庇うようにしながら大幣を向け続ける。

消耗させる気か？

「ねえ蓮子……」

「大丈夫よ、メリー」

メリーの心配する声に振り向かずに応える。いや……。

もう一度、メリーの方に少し振り向きながら、大丈夫と応える。さあ……。

「蓮子！」

私が体を背けたのを逃すまいと、妖怪が一直線に大口を開けて飛び込んでくる。

さあおいで！

大幣を両手で構え、振り下ろす！

大幣が妖怪の頭を見事に捉える。

「ビンゴ！」

「すっ……すごいじゃない蓮子！」

「まあね。ただ、相手の動きを誘導しただけよ。襲いやすいようにね」

「なるほど」

「あんまり長引くとこちらに不利だったからね。早々に決めさせて貰ったわ。さてと……」

脳天に打撃をくらい、電気ショックで伸びている妖怪に近づき、大幣を突き立てておまけの電流をプレゼントする。

「これでしばらくは動けないでしょう」

「れ、蓮子……」

「なによメリー。別に私の趣味は妖怪虐待じゃないわよ？」

「違う……あれ」

いつの間にか、私たちは囲まれていた。何匹、何匹いる？

妖怪は私たちを囲うように、十匹は少なくともいる。

どうやって倒す。倒す？この全てを？私が？無理だ。余りにも多すぎる。

じゃあ逃げないと。どうやって？囲まれているのに？相手は犬型で走りも早い。

早く、何か、活路を、見つけないと。

隠れる？辺りは一面草原だ。

私は？どうしたら。このままでは、メリーを守れない。

どうする？どうしたら。何を。私が？どうやって。私は。私が。私は……。

黒い影。視界の端。飛び込んでくる。

危ない。避けないと。

違う。何が？違う。私じゃない。あいつは……！！

「メリー！！」